

氏名	金 孝真
ヨミガナ	キム ヒョジン
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第638号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 偶然の重層という変奏曲 〈作品〉 Forlorn Paradises 他4点 〈演奏〉

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	赤沼 潔
(論文第1副査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	片山 まび
(作品第1副査)	東京藝術大学	准教授	(美術学部)	谷岡 靖則
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	

(論文内容の要旨)

本論文では、高性能ソフトウェアを活用した新しい芸術様式が氾濫する今の時代において、伝統的な金属工芸のカテゴリーに属する鑄金作品の制作に関する研究の重要性について、作品制作を通じて考察する。

「伝統」や「鑄造」という言葉から感じられる重々しさのためか、そのような技法で制作された作品はあたかも伝統工芸品であるかのようなイメージに特定される傾向がある。しかし、筆者の場合は、表現媒体と制作の一部は伝統的な方式であるが、実際に完成した造形は現代美術・工芸により近いと言える。相反する概念として認識される可能性の高い「伝統的技術」と「現代的表現」。この二つの言葉を軸に研究を始めた理由は、大学時代は彫刻を、修士課程では金属工芸を専攻した後、現在に到る日本留学を決めることになったきっかけと密接に繋がっている。

現代美術工芸の研究者の一人として、鑄造技法に制限を設けず、多様な技法を併用させ造形する中で、技術の習得と直観的判断は作品構成の重要な要素となると考える。これは身体と精神の結合を意味し、他の美術分野とは違う特徴ともいえる要素である。すなわち、タリス・レイモンドの著書‘The Hand’で言及された「考える手」と認識される工芸の職人精神を示す。

一個人の生活における「私」は様々に与えられる役柄によって、本来の自我とはどこかずれた世界に押し込まれたりする。例えば、筆者は自分の外国人・留学生・主婦・保護者等の役割に居心地の悪さを覚えることがある。個人の生における自我、つまり外国人・主婦・保護者・留学生等、筆者を表現する様々な役柄は、時には私自身を本来とはどこかずれた世界に押し込まれたりする。その中で保たれる不安定な均衡は蠟で作った人体の変形と結合による重層で蠟原型になり、多様な鑄造法の併用過程を通し一つの作品に結実する。鑄造過程を経た個体は一つの塊をなし、地を足で踏みしめることなく浮遊しているこの群像は、長い間海外を転々としている作者を表し、または故郷を離れてまだ定着地を見つけることができず、流浪の途上にいる誰か、観覧者の人生の寂しさを投影する。

論文は三章からなり、第一章では、社会の構成員として筆者本人が向き合ってきた経験をベースに、現在私達が通り過ぎていく時間と空間で起る変化について、社会・科学・文化に関する他分野の研究を参照し

ながら美術作品としての表現方法を考察する。そして、筆者の家族構成員が異国で別の文化圏の人々と生活しながら経験してきた様々な現象と、筆者自身の学部での彫刻から修士課程での金属工芸、現在の博士課程での鑄金研究へと変化・発展してきた理由と過程・その関係性について作品と造形制作を含めて論じる。

第二章では、表現媒体としての鑄物の可能性について、材料と技法の観点から記述する。様々な種類の蠟を使用し、鑄造方法においてもより適切な技法を選択・併用してきた作業の進め方について述べる。人体の表現においては、精密鑄造と石膏の鑄造技法を用いて複製・変形による反復と結合で研究を行う。制作過程でたびたび手を触れた蜜蠟の特性、すなわち温度による変形と自由な表現の可能性に注目し、セラミック鑄造の原型作業からの表現拡張の可能性についても考察する。

第三章では、「複製、変形、反復と結合、そして積み上げた形」の方法で展開した作品の制作過程と博士審査前提出作品である「Forlorn Paradise - 悲しい樂園」に関する解説を中心に、筆者個人に起きた様々な偶然の出来事と時代的現象が絡み合っただけで作品に反映されるまでの相互関係性について論述する。現在の研究作品の全般に現れる鑄物の偶然性による微妙な表情は、他の表現媒体では代替できないもので筆者の研究テーマに力を与えてくれると考える。

(論文審査結果の要旨)

金孝真氏は、韓国に生まれ、本学で鑄金を学んだ。その作品は、自身の個人的な体験にもとづき立体的に組み合わせられた複数の小さな人体表現を特徴としている。とりわけ鑄金作家としての矜持を感じさせる点は、実に多岐にわたる鑄造法に取り組んでいるところにあり、論文にもそうした意欲的な作家の姿がよく表れていると言えよう。

本論文の構成は、以下のとおり3章からなる。

第1章では、個人の体験を踏まえて、時間と空間の変化について論じ、研究の背景を明らかにしている。とりわけ国と国との間を彷徨う「マージナルマン」としての自分、しかし運命に翻弄されることなく変化をつづける自我を冷静に見つめ、作品として昇華させようとしてきた過程が論じられる。

第2章では、技法が中心に述べられる。原材料である金属にはじまり、真土・精密鑄造法・石膏型鑄造法・セラミックシェル型鑄造法など多岐にわたる鑄造法、その特性、筆者の体験が論じられている。

第3章では、博士提出作品のコンセプト、制作プロセス、展示が中心に論じられている。キーワードとなる「マージナルマン」である自身の人生を「立体と立体を重ね合わせた」人体表現に置き換え、多彩な鑄造方法で表すことが示される。その鑄造方法においては効率的なプロセスと、たとえ移動があったとしても「手の中でコントロールできる大きさ」の原型を意識的に制作したことが明かされる。最終的には多彩な鑄造法を試みることにより、韓国の金工に伝統的を呼びさまることが目標として掲げられている。

論文の総評としては、文章に記すことに最初は戸惑いも見せた個人のライフ・ヒストリーを丁寧に論じたことにより、作品の背景が確かとなり、論文が提出作品を十分に補完する完成度の高いものとなったと言える。さらには多岐にわたる鑄造技法について写真と解説で詳細な紹介を行っており、今後、よりいっそうの詳述を加えるならば、作家の目指す韓国の金工に伝統を呼びさますることも可能となると期待される。

以上のように論文が作品の背景・技法・コンセプトを明快に説明するものであり、記述や構成にも優れることから、審査員の同意のもと博士学位に相当するものとして意見の一致をみた。

(作品審査結果の要旨)

金孝真氏の作品「偶然の重層という変奏曲」は、ミンコフスキーの四次元概念を基に韓国で制作してきた作品コンセプトを踏まえながらも日本で新たにコンセプトを積み上げた中で、自身の表現の進化としての鑄金作品と言える。

彼女のアイデンティティと言える彷徨う「マージナルマン」を自らによって紐解き、作品コンセプトとして組み込んでいくことによって、鑄造技法による表現を展開させながら形体を重畳し、鑄金としての作品の可能性を加味した上で自身の表現が成されている。原型としての蠟は、鑄金の中で表現するに当たり有史以

来全世界で原型として使われている素材であり、それを変形させた原型を巧みに操り表現している。鑄金の次にくる制作過程としての鑄造法案及び鑄型制作も形体の為に独自に考案し、イメージである原型を如何に金属で表現するのかを、表現の研究と捉えて鑄金における様々な鑄造法案研究を行なっている。金属の種類や着色法も韓国での金属造形作品時代と比較しながらも研究しており、コンセプトと照らし合わせながら表現としての理論を展開している。そういった思考をすることで、表現者としてそして研究者としても望ましい研究を行なっていると言えよう。

韓国では鑄造技法を学んだことは殆ど無い中で鑄金自体を日本で学び、その期間も短い間であったが、自身の熱心な研究によって鑄造表現としては十分に補われている。

韓国での鑄造作品は外注が多いため、自分で作品を鑄造してコンセプトを積み上げて行く発想が少ない。日本でのこの研究によって、彼女の目的に元々あった韓国での鑄造作品に於ける価値の再認識や理念の再発見とその再構築の場面を創ってくれることを期待して止まない。

コンセプトと鑄造プロセスと共に違和感なく表現されていることは素晴らしく、作品として十分に評価できることから審査員の同意のもと博士学位に相当するものとして意見の一致をみた。

(総合審査結果の要旨)

申請者は、審査論文「偶然の重層という変奏曲」の中で、鑄金作品の位置付けを考察し、自身を現代美術工芸の研究者としてとらえ、そこから現在の自身の置かれている状況やここまでの経緯を踏まえて浮遊する群像へ展開していく過程を述べている。また、科学技術が発達している現代において、伝統技法の継承の重要性を認識し、自身の表現へ積極的に活用していくことは金属工芸の可能性を広げる土台となることについて強調している。全体的に留学生であること、母親そして妻としての存在である不安定な状況の中から溢れ出てくる作品への投影が、その背景としての想像の世界観を見つめ、日常と鑄金造形との関連について作品を通して突き詰めていっている。そこでたどり着いた蠟を原型とする各種石膏鑄造を通してその蠟の群像から得られるゆらぎのある浮遊感が制作の原動力となっている。時間的流れによる不安感と動勢からの文章展開は、鑄造を実際に経験している者の心の奥に響くものであった。全体的に繊細な感情が散りばめられ、独自の工芸・鑄金の領域に踏み込んでいる内容は評価できる。

本審査作品 [Forlorn Paradises] は、石膏鑄造法・精密鑄造法・減圧鑄造法によるブロンズの人体の小型鑄物で制作した自身の浮遊感を伴ったインスタレーション作品である。多岐にわたる人体のいろいろなポーズをとった群像は空中に設定され、絞られた光源からの影を反映させて、自身の現在の状況や思考の内面を表現しているが、それらの群像は全体的に拡がりを見せ始め、独自の時間の流れを感じさせられる作品であり、評価された。

総合的として、韓国で作品を制作した際に強く感じていたことは、鑄造部分は全て業者発注となり、鑄造部分は自身の手で制作したいということであった。その要求が本学に留学した根拠になったが、その飢餓感と、また技術的習得の困難さから熱心さと共にとても苦勞しながら研究を展開した。そのような状況で着実に鑄造技術を自身の中に取り入れ、人体の小像を組み合わせ自身の不安定な状況を展示まで持っていったことは大きく評価できる。また、全審査員から博士学位を認める条件を満たしていると判断された。